兄の骨折から見えた世界
～人権の花が咲きほこる社会へ～

おおい町立大飯中学校　三年　網谷　香英良

三ヶ月前に高校生の兄が、サッカーをしている時に右腓骨を骨折し全治三ヶ月と診断されました。そこからギブス装着、松葉杖歩行の生活が始まりました。入浴の仕方に戸惑い、松葉杖を使いこなすのに苦労し、衣類の着脱に時間がかかるようになりました。また、毎日バスや電車に乗って通っていた学校には、車での送迎が必要な状態となりました。今まで普通にできていたことができなくなって、不自由の身となり、気持ちが沈み、不安だらけの兄。骨折が完治すれば、元の生活に戻れることが分かっているのに、直面した不自由さを受け入れるまでに時間がかかりました。

体の不自由な人、障害のある人を見たことはあり、なんとなくその人たちを理解しているつもりでいましたが、今回初めて自分の身近にいる人が、その立場となった時、見えていた世界はがらりと変わりました。できる人の視点からサポートする人の視点に変わったのです。家の中のわずかな段差が気になりました。廊下も広くないと通

りにくい、トイレもマットが敷いてあると滑りやすくて危ないと思うようになりました。今まで気にすることなく過ごしていた我が家も、不自由な足となっては、快適ではないと感じてしまいます。

日常の生活動作についても、今までと同じペースでこなせないもどかしさに兄も苛立ち、不自由な姿を他人に見られるのは嫌だと閉じこもりの思考回路にはまっているようでした。

「学校へ行かなければいけない。一歩、外に出たら一人で何とかなるのか。どうしよう。」

と兄の心の声が聞こえそうなぐらい不安な様子でした。

「折れていたのか？痛むのか？送り迎えしてもらえるか？心配しないで来たらいいよ。」

と、兄の担任の先生が電話で優しく励ましてくれました。

次の日、学校に行くと、ギブスの足を心配そうに覗き込む人、教室を移動するときに荷物を持ってくれる人、階段の上がり降りを見守ってくれる人、下校時に車までカバンを持って付き添ってくれる人、お迎えに来た母に明るく声をかけてくれる人。役割分担など事前に打ち合せして決めたわけでもないのに、たくさんのクラスメイトが率先して、ごく自然にサポートしてくれたそうです。

助ける事、支える事は当たり前のことです。面倒な事、

迷惑な事ではありません。今自分たちに何ができるのか、どんなサポートが必要なのかを考えて、今までと変わらない態度で接する姿勢が大切です。このようなメッセージが兄の心に響いたのです。

「毎日毎日、嫌な顔せずに気にかけて手伝ってくれる。本当にありがとうの感謝の気持ちでいっぱいや。」

と、感無量の兄。不安だらけで心細かった時、たくさんの人たちの思いやりや優しさが心に染み渡り、人は一人では生きていけない存在だと気づいたそうです。兄の通う学校では、人を思いやる優しさの種がまかれ、人権の花が咲きほこっているのです。

健常者として生まれても、人はいつどんなトラブルに見舞われて、障害を持つ立場になるか分かりません。障害のある人にもみんなと同じように日常生活を送る権利があると思います。学校へ行って教育を受ける権利、職場に行って働く権利など、人が人として、その人らしく、生きる権利がないといけません。そして、障害があると言う理由で、その人たちの活動できる範囲が狭くなってもいけません。障害のある人に対して、周りの理解や協力が必要であり、障害のあるなしに関係なく、みんな分け隔てなく、同じ人間として生きていける社会であって欲しいと願っています。

ある時、兄が通う高校の事を勉強ができない子が通う高校、成績が良いと向こうの高校へ行くのだ、と言っている人がいました。

「どこの高校行っているの？そんな学校しか行けないの？」

と心ない言葉を浴びせた人がいました。何を学びたいのかどんな部活動に入りたいのか学力以外でも選ぶ理由があり、どこの学校に行くのも個人の自由だと思います。それなのに学校名を聞いただけで、人の優劣をつけ、良し悪しを勝手に判断して、馬鹿にする風潮が存在しているのは、悲しいし悔しいです。これは、人権に関わる問題だと捉えました。

このように批判されても、劣等感の塊にならず、のびのびと明るく、楽しい学校生活を送り、人権の花を咲かせることができる素敵な生徒を育てた兄が通う高校、今の私は誰にでも胸を張って素晴らしく、立派な学校と言えるでしょう。人には得意なことも不得意なこともあります。勉強が得意な人もいれば、苦手な人も存在します。知識や技術を習得するだけにとらわれず、人として忘れてはいけない大切なものの存在に気づきを得る人に成長したいです。そして、人権の花がたくさん咲きほこる社会となることを望んでいます。